

与論島語と上代国語との比較研究

山 田 實

はじめに

与論島語とは、鹿児島県奄美群島の最南端に位置する周囲六里の小島において語られていた言語のことである。この島は、沖繩諸島が日本復帰をみていないこんにち、北緯二十七度線上に浮かぶ南の国境の島である。

与論島は、北部沖繩とはわずか七里隔てているのであるが、そこに住んでいる約八千二百人の語っている言語は、厳密にいつて沖繩語と異り、また奄美諸島語とも異っていて、これらの島々との間に会話が通じにくくなっている。

だが、与論島は、古代日本語の古形を多く保存しているほか、古代日本の古い習俗も今なお保存していて、この島にいるときながら古代日本の生活文化の中に、我が身が置かれているかのごとき感じをさえいだかせるのである。

わたくしは、早くからこの島の古老（七十歳以上）について、言語・習俗（民謡をも含めて）等の調査研究に乗り出し、上代文献にあらわれた語彙・語法・音韻・習俗との比較研究を試み、その成果として、第一編語形及び語義の比較・第二編語法の比較・

第三編音韻の比較・与論島の習俗と言語の研究、を謄写印刷して学界に発表したのである。亡びつゝある国語史上と民俗学上の生きた資料を掘り出すには、幾多の困難がつきまとっていたのである。

今ここには、右の著作の中から若干の語を取り出し、少し説明を加え添えて記述してみたいと思う。

1、あま（天、阿麻）

奈良時代の頃には、「あま」という語を「天」の文字を用いて書き表わしてある。例えば、古事記上巻に、その編纂者たる安万侶が註記したのものによって見られる如くである。すなわち、

天地初発之時 於高天原成神名 天之御中主神阿麻下天云
 阿麻と訓ませたのは、高天原の「天」の文字のことである。

阿麻の語義について、古事記伝の説によれば、天は阿麻なり、かくて阿米とふ名義は、未だ思ひ得ず、としてあって未詳語に扱っている。

ところが、与論島語にも、「あま」という語がおこなわれてい

る。それでは、与論語でいう「あま」[a ma]とは、どういう意味があるかといえは、それには二つの意味があつて、

一は、天空のこと、

二つは、遙か遠方のこと、遠い彼方のこと、

である。与論語の音声は、[a] [ma] (体言や用言が接続して複合語を構成する場合には、[a ma] のごとく、アクセントが移動することがしばしば起る) であるから、奈良時代古事記編纂の頃の音声も与論語と同じものか、また近似したものではなかつたらうかと思われる。それで、当時の音韻としては [a ma] であつたらう。天や空を指している場合の与論語は、どこからどこまでの広さ高さを限定していうのではなく、単に漠然と天や空中を指しているのである。だから、鳥や虫や雲が飛ぶ場合でも、天の星や天にあると考えられた国をいう場合でも、

天飛ぶ雲 (a ma tu bu ku mu)

天飛びゆるあや蝶 (a ma tu bi ju ru a ja pa pi ru)

などというのである。[a ma tu bu ku mu] は、古老がていねいに発音する場合の音声であるが、アクセントを見ると、天、飛ぶ、雲の語頭の音節が高くなつていて複合語を構成しない以前の天、飛ぶ、雲の頭音節のアクセントが違ったことが知られる。ところが、少し早口で発音する場合とか、部落により、[a ma tu bu ku mu] の形となつてあらわれるのを見る。すなわち、アクセントが移動している。前の場合の音声は、固い感じをもつし、後の場合の音声は、如何にもリズムカルで音楽的である。この二通りのアクセントについて、音声の発生を考える時、前の場合が

先で後の場合がおくられて生じたものではなからうかとも思われるけれども、はっきりしたことはむろん判らないのである。

また、遠い処を指す場合の、「あま」は、これも漠然と遠方を総称する意味に用いられている。「あまぬしま」という場合、

一つの意は、遙か遠方に存在する島、

二つの意は、遠い処にある村里、部落、

の意として用いられている。もちろん、遠い処に見えている島や部落や田畑を指している場合もある。

また、古事記上巻の八千矛神が沼河比賣の家で歌った歌の中に

伊斯多布夜 阿麻波世豆加比

とあり、沼河比賣の歌の中に、

伊斯多布夜 阿麻波世豆迦比

とあるが、その、阿麻波世豆加比、阿麻波世豆迦比を諸家は、天馳使の文字を充てていられる。ここの阿麻は、天空のことを指していったものか、または遠方の彼方のことを意味していったものか、明らかにすることはむずかしいが、要するに、奈良時代の頃の、「あま」は、与論語と同じく二種の意に用いられていたものではあるまいか。

2. たかあまぬばる

古事記をはじめ書紀・万葉集等の上代文献にあらわれた、高天原・天原なる語について、その語義を考えてみよう。古事記上巻にあらわれている。

天地初発之時 於三高原一成神

天之御中主神

高下天云
阿麻下效此

の高天原について、古事記伝は、タカマノハラと訓ませている。それ以後その訓み方に従っているが、その訓はそれでよいと思われるけれども、語義については、古事記伝をはじめそれ以後の諸家のお考えになつてゐるものについて、従うことは出来ないように思われる。古事記伝の説によると、

高天原は、すなはち天なり、然るを、天皇の京を云など云る説は、いみじく古の伝へにそむける私説なり。

原とは広く平らなる処を云ふ。

として、高天原を天だと考えていられたようである。この考え方に基いて、現実の国土にあらざる理想世界と考へたり、神々のまします世界と考へたりしている人が多いのである。また、それに対し現実の国土(国内と国外に求める人もある)だとする考へ方もある。私が述べようとするのは、そういう考へ方ではなく、高天原の語義について、言語学的に考へてみたいということである。「あま」という語を「天」の文字を充ててあるため宣長のとき考へ方も生ずるのであるが、奈良時代の頃当時の人々が高天原を、天だと考へたり理想世界だと考へたりしていたとしてもその語の発生した以前の意味はどうであつたか、についても一応考察してみる必要がある。

与論島でおこなわれている語に、あまぬばる・あまぬ高原・高あまぬ原^{タカマノハラ}

というのがあるが、その与論島の語と高天原とを比較して述べてみたいから、しばらくお耳を拝借したい。

与論語の、あま[ama]は、前に記したごとく、高い天空のこ

とであり、又は遠い処の意味をもつ語で、「天」の文字を充てても悪くはなからう。あまぬ原(ama nu pa ru)の「ぬ」(nu)は、助詞「の」に当る語で、国語の助詞「の」は南島の諸語で「ぬ」(nu)であらわれている。与論語の、ばる(pa ru)は、「ばら」の形であらわれることもあるが、一般的には、「ばる」の形であらわれている。いかなる意義をもつかといへば、一つは草木の生えた野原を意味し、二つは、耕作地(作場)を意味し、三つは部落(又は村落・村里)を意味して三通りに使われている。田ぬばる成て [ta: nu pa ru na:] とか、畠ぬばる成てい、という場合の「ばる」は草が茂つて野原になつたことを意味し、(畠はバタキの形であらわれることがある)ばる行かむ [pa ru nu ka m] という場合の、「ばる」は耕作地を意味し、ナゴ一原・伊波原・殖生原・増木名原等の地名をいう場合の、「ばる」は、村落・村里・部落を意味している。

そこで、「あま」と「ばる」とが結合して生じた、「あまぬばる」[ama nu pa ru]は、遠い処に設けられた耕作地、又は遠い処にある村里、という意味をあらわしている。高い処に設けられた耕作地をいう場合は、たかばる(高原)といい、高い処でしかも遠い地の耕作地をいう場合は、高あまぬばる [ta ka: a ma nu pa ru] といっている。与論島では、住み屋を自分の耕作地内か近くに構築する場所が多いので、商店のある地点以外は、家屋が散在して家群 (ya: nu ru) は、五、六軒か十軒多くて十四、五軒位になつている。だから、三、四軒位の里を、家むら、という場合もあるし、五、六軒又は十軒位の家の群を、やむら、と

か単に、村といっている。それで、村むらというのは家の群から生じた語であると考えられる。

「原」は、上代文献に用例が多い。奈良時代の頃には、ハラ・ハルの二通りの語形があらわれていたようである。

豊国乃加波流波吾宅紐兒爾伊都我里座者革流波我家

万、九、一七六七

加波流の「波流」は、*ba ru* だったように思われる。豊前国風土記逸文によると、

豊前国風土記曰 田河郡 鹿春郷在郡東北 此郷之中有レ河

年魚在之 其源從郡東北杉坂山一出 直指正西流下

添會真瀨河焉 此河瀬清淨 因号清河原村 今謂鹿

春郷一訛

と記されてあるが、その中にあらわれている鹿春は倭名鈔のいうように香春郷のことで、万葉卷九の豊国乃加波流も風土記の鹿春と同一の地名であろう。風土記編纂の頃は、カハルの語形に転訛していたが、古くは河原村といていたというのであるから、河の流域に村里があったことがわかる。河原は、カハル、又はカハラであったと見られ、ハ(ba) が連続してあらわれているため前のものを脱落して、カハルというようになった。その他那婆理之稱置(記、中)、通比婆理(記、中)、伊賀国名張郡(紀)等に見える、婆理・張も原のことを意味する語のように思われるので、奈良時代の頃の「原」(ハラ・ハル)は、与論語と同じく村里又は耕作地のことを意味する語として用いられていたものと見られる。

そのように考察して来る時、高天原の語義は、遠方の高地に設け営まれた村里(耕作地をも含めて)と考えても不都合は生じないであろう。その考えで誤りがないものとすれば、高天原はいずこの地点だとする場所の決定(又は限定)は必ずしも必要としない。多くのタカマノハラ(又はタカマノハル)がありうる訳だから。

3、宇伎由比遊ユキユヒユビ

この部分の記述は、拙著与論島の習俗と言語の研究から転載することとする。

宇伎由比の語源については、「宇伎」は、酒盛り、または盃に関係する語であり、「由比」は、寄ひで、つまり寄り集る義であると考えられる。与論島に、タマウキ(Tamauki)(ローマ字や音声記号の上に附されてある(は、アクセント記号のつもりである))といって盃を意味する語があるが、大昔の盃はこんにちの陶磁器類のものとは異り、貝殻(玉もついていたのかも知れない)を用いたように思われる形跡がある。

現在でも貧しい者は杓子を用いるのに、三十糧位の長さの小指大の竹の片端を割り、その中に貝のフチを挿し込んで用いているのを見る時、飯碗も盃もずっと以前は貝殻を用いていたものであろう。

宇伎由比には、男女がつどい必らず歌舞がつきものとなつてゐる。宇伎由比の語は、また、

あぬ人^{あぬ}や宇伎由^{ウキユ}血種^{ケム} [a nu pi tu ja u ki ju tsi: ta ni] の会話文にあらわれているように、宇伎由比の比を脱落して、宇伎由の形でもおこなわれている。血種とは、血筋とか血統とかの意をもつ語で、宇伎由^{ウキユ}血種^{ケム}といえ、歌舞または音楽芸術の巧みな血統とか一族とかの意をあらわしている。

あぬ人^{あぬ}とは、あの人ということで、「ぬ」は、「の」に当る。

(イ) 含み酒め遊び [ku ku mi sa ri nu a su bi]

稲刈りや麦刈り等の収穫を終え、または、田植えやその他農作物の植付けを済ませた直後に、同じ部落の若い男女たちが、或る女童^{こども}(十七・八歳から二十歳前後の未婚の女、[me wa ra bi]の形であられる外、[mi wa ra bi]の形でもあらわれる)、の家に寄り集る。その時に、男は酒一合と米一合とを持ち寄り、処女^{よめ} [wu tu mi] たちは、米一合と野菜^{ヤサヒ} [ja se:]、ネギ、大根、ニンジンなど時季にあるものの少量を持ち寄るのである。そして、男は当番制によって鶏一羽を出すことになっている。(鶏を出すことのできな者は魚類か肉で代用する) 調味料や鍋、釜等は、集い家に当てられた女が負担することになっている。

或る晩を選定してこれらの物を持ち寄り、集ひ合ふ [tsu du ri a fi] のである。女たちはこれらの材料で、味物^{アジモノ} [u ma sa mi ni] をつくり、自分の好きな(または気に入る)者同志の男女が向い合いましたは隣り合って坐り、善飯^{ぜんぱん} [we: ba n] が始るのである。食べつつ酒をくみかわし、やがて歌が男の弾く三味線^{さんみせん} [sa mi

si nu] に合わせて唱われる。手拍子も打ち鳴らされる。男女それぞれほろよい気分になると踊りが出る。男が先ず踊ってから自分の好きな女を引き出して踊らせる。かくして、いよいよ興に乗り酔いが廻ってくると、男が口に酒を含み、飲み降ろさずして、それを、自分の好きな女の口の中に注ぎ込んで飲ませるのである。即ち口付けの酒飲み^{ウケモノ}の方法がおこなわれるわけである。こういう遊びの方法を、含み酒^{ウケモノ} [ku ku mi sa ri] とか、含み酒遊び^{ウケモノ} [ku mi sa ri a su bi] というのである。

かように、含み酒による口付けがおこなわれるのであるが、女がその男に気が向かない場合には含み酒は決して受けないのである。

この遊びには、宇伎歌^{ウキウタ}(又は宇伎由歌)が、男女相互間に歌われる。

はがむ味さるよ [fa ga m u ma sa ru jo]
大物酒や [u pu nu nu sa ri ja]
和奴一人しやよ [wa nu tsi ri si ja jo]
飲みやならじ [nu mi ja na ra zi]

「はがむ」とは、かくもまあ、そんなにまで、よくもまあ、といった程の意。「大物酒」は、大盃になみなみと盛った貴いお酒のこと。

「和奴」は、我れ、のことで、自称の代名詞。直訳すると、かくもまあ、おいしい(みごとな)大盃になみなみと盛ったお酒であることよ、われ(又は自分)

ひとりではね、(とても) 飲むことはできないのよ
(又は飲めないのよ) といった程の意となる。

愛しある思おもみ友加那と、カ(ka na) シ(si a ru u mi du si ka na
tu jo:]

↑の記号は、音調が尻上りになることを示す。

寄り集ぢひついていよ (ju ri ti si du fi ti jo:]

「集ぢひ」は、(tsu du fi) の形であられることも多
い。

飲ヌみ遊アばなむ (nu mi a su ba na nu:]

最後の m₁ の u は、小字で記したが、これは、軽く添え
ることを意味する。m は口を閉じる。

「加那」は、愛人のこと。直訳すると、いとしい好き
な友達や愛人(又は恋人)と、よりあつまって、飲ん
で遊びたいものだなあといった程の意となる。

あがり太陽タイによ (a ga ri ti da ni jo:]

打ち向ウかてム (u ti mu ka ti jo:]

天飛テンびフゆるヤ (a ma tu bi ju ru ja]

あやはアびるヤ (a ja pa pi ru ja]

「あやはアびる」は、班蝶で、まだらになった蝶のこと

まぎ待マちウりト (ma gi ma ti ju ri jo:]

あやはアびるヤ
いやいイ娶ムらム (ja i ji me : tu ra nu:]

あやはアびるヤ

「まぎ」は、求マぎ、婚ムぎで、求めること、性交のこと

動詞である。まがむ、まぎ、まぐと活用する。待ちゆ
りよ、は、「待ちいなさいよ」という意の動詞命令形

「いや」は、感動詞で、物事におどろいた時又は嘆息
した時発する語。「い」は、感動をあらわす間投助

詞。

蝶が、花にとまり蜜を吸う時、羽を動かし体を揺する

この動作も、マグという、動物の性交は、もちろん、
求める意も含んでいるものと見られる。

右の歌を歌いつゝ右手にカラカラ(又はカンペン)、左手に盃
を持ち、リズムに合わせて立ちつ立膝つゝ舞うのである。

含み酒は、男女間の交際の際の場であり且つよい機会ともなる。ま
たお互いの求婚の約束をする機会ともなり得るのであるが、結婚

するまでは体を許し合うということはせず貞操観念が強かったと
古老は語っている。それで、この遊びはやがて妻になるかどうか

を問ひ質す、すなわち、妻問メトひ (u u tu u) (古老がていねいに
発音する時は (u u) に近い形であられるが、その他の者が早

口でいう時は (u u) に近い形であられる)。または、ソマト
ウウ (tsu ma tu) に発展してゆくのである。

右の含み酒の習俗は、与論島において今の六十五歳以上の人々

が二十歳代の頃すなわち約四十年前頃まではおこなわれていた。善飯を終え、含み酒をやり取りしてからは、大抵の場合、恋の懸歌 [ku fi nu ka ki u ta] が歌われる。たとえは、

み山くぶが葉や [mi ja ma ku bu ga su: ja]
七枝にかゝる [na na ju da ni ka ka ru]
和奴や那邇枝に [wa nu ja na: ni ju da ni]
かゝり欲しやよ [ka ka ri pu ja jo:]

と男が歌うと、女は即座にその歌を受けて、次のことば返歌 [ke e si u ta] を歌うのである。

振りかゝるかゝる [pu ri ka ka ru ka ka ru]
我が枝にかゝる [wa ga ju da ni ka ka ru]
振りかゝるいからや [pu ri ka ka ti ka ra ja]
すすーや為らぬ [su su: ja si ra nu]
くぶ」とは、蜘蛛(網のことき巣をかける動物)のこと。

「那邇」は、汝兄・汝姉が原意で、転じて、あなたという二人称代名詞として、古老間に用いられている。「すすー」とは、うらみ、憎しみ、憤り、後悔等の意。

もちろん、かき歌は即興で歌われるので、なるべく人に真似のできない奇抜でしかも恋心の情味たっぷりなものが好んで詠まれる傾向にある。従って、歌詞作りの修練場所ともなりうるわけである。

返歌の音韻論的な点について述べるなら、古老が丁寧という時

は、/ke e si u ta/ に近い形となり、/e/の重母音があらわれていると認められるのであるが、一般的には e が長音化して /ke: si u ta/ に近い形としてあらわれている。元の形は /ka fe si u fa/ であつたものと思われるが、その形から /ke fe si u ta/ となり、さらに f を脱落して /ke e si u ta/ /ke: si u ta/ と音韻変化を生じたものと見られる。「返」の /ka fe si/ で母音結合状況を見ると /ka/ の /a/ /fe/ の /e/ が異なる母音であらわれている。そこで、同母音に同化調和させようとの意図から、/ke fe/ の形に転じて、語幹の各音節を同母音をもって結合した /ke e si u ta/ を知ることが出来る。

(ロ) 並びき遊び [na ra bi pi ki a su bi]

「並びき遊び」は、今から五十年前頃まではおこなわれていた遊びである。男女寄り集って善飯をして酒盛りをおこない、男が自分の好きな女に対して含み酒を与え、宇伎歌を歌いつゝ踊ることについては前に記したとおりでである。踊り方としては、右手にカラカラ又はカンピンを持ち、左手に盃を持ち、歌に合わせてリズムカルに、両手を交互に上げ下げし、表情たっぷりとして、自分の好きな女の前に進み出て、膝を立て、または立ちつゝ坐りつ舞うのである。そして、歌に合わせつゝ酒を盃について女の口に入れる。女はその返し踊りとして、両方の掌を上に向け物を捧げることとく、また掌を下に向けて両手を突き札を述べることとく、立ちつ坐りつ立ち膝しつゝ舞うのである。

このような踊りがおこなわれた後で、いよいよ興にのれば、好き

な男女が向かい合って坐り、お互いに股と股とを飲み(男の右膝を女の両股の間に置き、女の右膝を男の股に飲む)含み酒を交わしつゝ宇伎歌を歌うのである。このように、膝を股にはさむことを、股くはし[*mu ni ku fa si*] (古老がていねいにいう時は股は、[*mu nu*] に近い形であられる)といっている。こうした遊びが、並び引き遊びである。股を並べ飲んで相手を引き寄せることから、こういう遊びの名が生じたものであろう。

花ぬ美ら花や [*pa na nu ku ra pa na ja*]

村々にあるが [*mu ra mu ra ni a ru ga*]

情ある花や [*na sa ki a ru pa na ja*]

一人と一花 [*tsu ri du tsu pa na*]

と男が歌うと、女は、

愛し人とならば [*ka na si pi tsu tu na ra ba*]

朝なゆし知らじ [*ta sa na ju si si ra zi*]

憎さしと、得りば [*mi ku sa si tu we ri ba*]

夜明き苦しや [*ju a ki gu ru sa*]

と歌い返す。こうして、次々と懸き歌を歌いつゝ数時間経過してから、全員で、

何時寄り合ひ [*tsi ju ri a fi*]

見やりゆんが [*mi ja rju n ga*]

まにまにど、友等 [*ma ni du du si n kja*]

互いに縁付きて、 [*ta ga i ni ju nu tsu ki ti*]

遊びしやびらむ [*ta su bi ya bi ra mu*]

を歌って座が退るのである。

現在含み酒遊びや並び引き遊びはおこなわれてはいないが、歌舞して遊ぶ宇伎由遊びはおこなわれている。若い者のおこなわれる、夜ぬ遊び(又は由流由流ぬ遊び)には、酒盛りを伴うことが少く、また古い宇伎歌を歌える者もない。若い者がいう宇伎由遊び、というのは、恋の懸き歌遊びのことである。この種の遊びも急に下火となりやがて亡びようとしている。

紙数の都合で、上代文献にあらわれた宇伎由比、その他の語や習俗との比較については省略することとする。

(三月一〇日)